

平成 27 年度人文科学研究所総合研究調査旅程

本調査旅行では初めてロシアに渡航し、モスクワ、黄金の環（セルギエフ・ポサード、ウラジーミル、スーズダリ）、ノヴゴロド、サンクトペテルブルク等、ロシアの歴史・社会の理解に欠かせない歴史遺産や文化宗教施設を巡り、またモスクワ大学・サンクトペテルブルク大学との学術交流も行った。

8月26日12:00成田空港をアエロフロート261便で出発。10時間余りの飛行の後、夕刻モスクワ・シェレメチェヴォ国際空港に到着した。バスで移動を始めるや、車窓には白樺並木が続き、まるで高原に降り立ったかのような爽やかな錯覚を覚える。しかし、間もなく火力発電所、工業地帯、商業施設が次々と現れ、モスクワ市内まで片側5車線の巨大な高速道路を進んだ。市内でもヒップホップ風のグラフィティはあるのに別段ロシアらしいものはなかったが、突然白壁に大きなキリストの壁画があるロシア正教会が見えて、漸くロシアに来たという実感が沸いた。モスクワおよび近隣地域のガイドを務めてくださったユリーさんは、日本中世文学の研究者でもあり、余りに流暢で文語的な日本語に驚かされながらの旅路となった。

8月27日朝、黄金の輪と呼ばれる環状の古都群に向けてモスクワをバスで出発し、2時間余りでセルギエフ・ポサードに到着した。この町で最も重要な歴史遺産であるトロイツェ・セルギエフ大修道院に直行すると、高い塀に囲まれた大修道院に入る前に、大きいがつつましく立つ聖セルギウスの像に迎えられる。観光客は記念撮影をし、信者は十字を切って祈りを捧げる。ガイドさんによると、13世紀半ばに全てを神に捧げる厳しい生活を送っていたセルギウスの名は広く知れ渡り、ロシア中の敬虔な人々がセルギウスを慕って集まりこの修道院ができたという。セルギウスは死後列聖され、その墓も大修道院内にある。敷地内には複数の教会・大聖堂・鐘楼などが立ち並び、一大宗教施設だ。

入り口は門と呼ぶにはあまりに重厚だと思いきや、洗礼者ヨハネを記念する聖堂を上部に冠していた。元々は皇帝と総主教の専用門であり、その他の者は隣の小門を通っていた。往時の一般人が見ることのなかった長い門の内部の宗教壁画を見ながらくぐり抜けると、目の前に忽然と現れたのが、白亜の壁と玉ねぎ型の青い丸屋根が目を奪うウスペンスキー大聖堂だ。まず隣の僧院食堂から順を追って敷地の内部へ歩を進めた。僧院食堂は細かく色とりどりの菱型模様で、目の前にあるウスペンスキー大聖堂とは全く異なる建築様式だ。なぜなら、この大修道院の中の建造物は14-18世紀にかけて建てられたため、異なる建築様式が混在する。17世紀後半に建設された僧院食堂の内部には壁画や彫刻が豪華に施されており、最奥部にイコノスタスがある。500平米もの広さがあるのに、その空間を遮る柱がないことが特徴的とのことだ。確

かに、修道院の暗いイメージと異なり、広く明るい空間に壁・窓・天井の装飾が気持ちよく見渡せた。僧院食堂を出て、大修道院の敷地の中央部へたどり着くと、形も色も大きさも異なる複数の教会、大聖堂、鐘楼を一望できる。建造物の数に負けず観光客も多く、特に鐘楼の横にある聖なる水を汲もうと、人だかりができていた。

この大修道院の中で最も重要なトロイツキー聖堂は、あいにく修理工事のため外壁がすっぽり覆われており、黄金の丸屋根も白壁も見られなかった。1420年代に聖セルギウスの墓の上に建てられたこの聖堂は、工事中の小さな入り口を入ると、内部もこじんまりとしているものの、薄暗い聖堂内は厳かな静けさが保たれている。壁画の色合いは何百年もの時を経てなんとも言えぬ美しい色調である。アンドレイ・ルブリョフのイコン画がオイルランプに薄っすらと照らし出され、更に神聖さを醸し出している。

いよいよウスペンスキー大聖堂へ歩を進める。丸屋根の青色は、聖母マリアを象徴する色だという。先の僧院食堂でも多用されていたパステルカラーは、三位一体の象徴というから、ロシア正教会の建造物が色鮮やかで美しいこともうなずける。ウスペンスキー大聖堂の内部に入ると、天井の高さと壁画の多さに（そして人の多さにも）圧倒される。イコノスタスも巨大で迫力がある。シャンデリアは1.5トンもあると聞いて、そこまでしなくても、と思うのは宗教心が足りないからか。このウスペンスキー大聖堂はモスクワの同名の大聖堂を模したものだが、イワン雷帝が自分の手で息子を殺めたことの懺悔の証として建立し1585年に完成した。その圧倒させる建築と装飾は、イワン雷帝の激しい悔恨の念の表れでもあったのだ。

昼食後、12-13世紀のウラジーミル・スーズダリ公国の首都であったウラジーミルへ3時間かけて移動した。モスクワとウラジーミルをつなぐ道は、その昔シベリア流刑地に向かう受刑者が徒歩で移動させられた道だがその一部をバスで行くだけでも遠く感じられる。ウラジーミルに着くと、先ず12世紀の白亜の建造物群の一つであるドミトリエフスキー聖堂を訪問した。聖堂の白亜の外壁には植物・動物・聖人らの細かい彫刻が施されレースの様に美しい。教会の中は展示室となっており、イコン、フレスコ画、黄金の十字架の他、外壁の彫刻の説明パネルなどが展示されている。

次に公園の見晴台を歩いてウスペンスキー大聖堂に向かった。ウラジーミルのウスペンスキー大聖堂は、遠方まで見渡せる丘の上の広大な敷地にそびえ立つ。「ウスペンスキー（Успенский）」とは、「聖母マリアの昇天（Успения Пресвятой Богородицы）」の略語であり、先のセルギエフ・ポサードもそうだが、同名の大聖堂が東方正教会の各地にある。ウラジーミルのものは、アンドレイ敬虔公の命により12世紀に建立され、高さは26mで、屋根にも窓がある。当時は全ての壁に壁画があったが、今は15世紀のアンドレイ・ルブリョフの「最後の審判」を残すのみだ。有名な「ウラジーミルの聖母」もこの教会にあったが、現在はモスクワの

トレチャコフ美術館所蔵である。大聖堂内には祈りを捧げるバルコニーに通じる螺旋階段があり、英国から取り寄せた石棺にはウラジーミル州の初代知事が眠る。この日は午後3時より大きなミサがあり、翌日は聖母の記念祝典ということでどことなく高揚感が漂っていた。ウラジーミルの白亜の建造物群はなぜ白いのかというと、白い石（石灰岩）は耐寒性があり、柔らかいため彫刻に適しているからだ。彫刻は時代によって様式が変化し、12世紀には深い彫りであったが、18-19世紀には浅く平たい彫りとなったという。



ウラジーミルのウスペンスキー大聖堂（12世紀）

[撮影：飯沼建子]

再び広い公園を歩いてウスペンスキー大聖堂を後にしたが、振り向きながら遠ざかると、この巨大な大聖堂の全貌が徐々に見えてきて、公園の出口近くで一番見事な姿が見えた。かつてロシア全体の大聖堂として崇められたことが偲ばれる。公園前の広場には、絵を描くアンドレイ・ルブリョフの像があった。天才イコン画家として知られるルブリョフだが、モスクワに降り立ち最初にガイドさんから伝授された、イコンスタスに対する基本的な心得を思い出した。イコンスタスは絵画として描かれたのではなく、神聖な場所を仕切るものとして作られた。制作者は画家ではなく、聖職者であり、イコン制作は芸術活動ではなく、神聖なる行為なのだ。

日暮れ前に急いで黄金の門を見に行く。かつて騎馬民族の侵入を防ぐため城砦（クレムリン）が築かれ、町を囲む城壁には複数の門があった。現在は黄金の門と土塁の一部が残るのみだ。黄金の門は元々13mの高さだったが、今は5.6mでむしろ愛らしく通りの中央に鎮座している。1238年に襲来したモンゴル軍は、この門を突破できず、南東の城壁と土塁を壊して侵入し町は破壊された。かつての都の盛衰に思いを馳せながら、次の訪問地スーズダリへバスで移動し、密度の濃い初日を終えた。

スーズダリは、カーメンカ川が町の中心を蛇行して流れ、教会が散在する美しい町だ。8月

28日は、スーズダリの木造建築・農民生活博物館の訪問から始まった。この博物館はソ連時代の1960-70年代に造られた屋外博物館で、18-19世紀の教会、農民の住宅・作業小屋など、この地域の木造建築物を移設して展示している。広大で緑豊かな敷地は、陽だまりで来訪者が憩い、博物館というよりも公園だ。

まず農民生活の展示場所を回った。1861年の農奴解放後の農民生活を知る上で、19世紀の農村の様子は興味深い。典型的な農家の住居は平屋で、入り口の開口部が低く、調理台の位置の真上に老人用の寝台を置くなど、暖房上の工夫を凝らしていた。居間・寝室・調理場が一部屋にまとまっている。部屋の一番奥にはイコンが掲げられ、その下には一家の主が座り、他の家族は細い木のベンチに詰めて座った。ぎりぎりの生活で家族が身を寄せ合って暮らす様子が伺われる。一方、裕福な農家の家は外壁に彫刻がある2階建てで、1階は雇われた織子が機織りをする作業場、2階が住居だ。この他の展示には、19世紀の足踏み井戸があり、人が大きな木製の足踏み車の中に入り歩くことで桶が井戸から水をくみ上げる仕組みと、なかなか大仕掛けである。



スーズダリの木造建築・農民生活博物館の変容教会（1756年）

[撮影：飯沼建子]

次に木造の教会を見学した。変容教会（1756年）は、コズリャティエヴァ村から移設された、趣あふれる木造建築だ。複数の階層を積み上げた上に、全て木材で玉ねぎ型の丸屋根まで造っている。復活教会（1776年）は、パタキノ村から移設され、食堂と鐘楼があることが特徴的だという。

屋外博物館を後にし、スパソ・エフフィミエフ修道院へ向かう。1352年創設の修道院で、これも城壁で囲まれた大規模なものだ。厚く立派な白い門をくぐり、奥の方にある16世紀築のスパソ・プレオブラジェーンスキー聖堂へ。七つの丸屋根が特徴的で、内部一面に青と橙色が入り混じったフレスコ画がある。折しも二人の僧侶による聖歌が始まり、聖堂内の音響も素晴ら

しいことがわかった。この聖堂の横には、17世紀にポーランドとスウェーデンの侵略に対して民衆を率いて闘ったポジャルスキー公爵一家の墓がある。隣の鐘楼では、ちょうどベルコンサートがあり、木立の中に人々が集まり耳を傾けた。最後に宗教上の有罪者を収監した刑務所を見学してから修道院を後にした。

次はスーズダリのクレムリンだ。11世紀に建設されたこのクレムリンには、総主教の宮殿、マリアの誕生を記念するラジジェストヴェンスキー聖堂、鐘楼、教会などがある。マリアを祀っているから、ラジジェストヴェンスキー聖堂の丸屋根は当然ながら青色だ。鐘楼の時計は数字ではなくキリル文字が刻まれており珍しい。

昼食後、地元産品の青空市場に足を延ばすと、ベリー類・梨・はちみつ・きゅうりのピクルス・トマトソースなどが売られていた。のどかで風光明媚なスーズダリをもって黄金の環の訪問を終え、午後2時にモスクワへ向けて出発した。夕刻モスクワに着くと、モスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学日本語学科のステラ・A・ブィーコヴァ先生、ヴィクトル・マズリック先生、ナターリヤ・クルニエタ先生と交流会を行った。モスクワ大学はちょうど学内に入ることのできない期間であったため、先生方にはご足労いただきこちらの宿泊先までお越しいただいた。モスクワ大学での研究・教育の様子や、ロシアにおける日本語・日本文化への関心などについてお話を伺い非常に有意義であった。



モスクワにて、モスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学日本語学科の研究者と交流

[撮影：室井義雄]

8月29日はホテルを9時に出発した。まずはクレムリンを目指す。クレムリンとはロシア語で城砦を意味し各都市にそれぞれクレムリンがあるが、「クレムリン」と聞いて思い浮かべるのは間違いなくモスクワにあるクレムリンであろう。クレムリンの歴史はモスクワとともにあり、モスクワは1147年に初めて歴史に登場したといわれる。1156年にユーリー・ドルゴルキー公

爵がモスクワに築いたクレムリンは土塁と堀に囲まれていたそうである。モスクワはクレムリンを中心に同心円状上に広がる都市であるので、まさにクレムリンはロシアの中心地にある。その後 14 世紀にモスクワが首都になりクレムリンは要塞となって以降、政治的、イデオロギー的变化とともに数々の拡張・再編成をへて現在の姿になった。現在のクレムリンは、モスクワ川が大きく蛇行した外側に、全長 2235m の赤い城壁で囲まれて存在している。内部にはソボルナヤ広場、クレムリン宮殿、武器庫、ウスペンスキー聖堂、ブラゴヴェシチェンスキー聖堂など数多くの建物があり、総面積は 28 万㎡に及ぶ。29 日は会場前にクレムリンに到着したにもかかわらず、入り口のクタフィア塔前は各国から訪れた観光客であふれかえっていた。クレムリン入場後は、ソボルナヤ広場を通り抜けクレムリン宮殿を右手に回り込むようにして国立武器庫博物館に向かった。武器庫はロシアで最も古い博物館と言われているようで、15 世紀から 20 世紀にかけての工芸品が収蔵されていた。武器庫には金銀細工だけでなく、衣装、武具からは馬車まで展示されていて、ロシアの皇帝の栄華がしのばれた。武器庫を出た後は、またクレムリン宮殿わきの道に戻り、ソボルナヤ広場に面したいくつかの教会を見学した。最初に訪れたのは、アルハンゲリスキー大聖堂であった。アルハンゲリスキー大聖堂にはピョートル大帝時代までのすべてのモスクワ大公とツァーリの墳墓があり、内部は数多くの棺がロシア正教の特徴ある壁一面のイコン（イコノスタス）で囲まれていた。次にイワン雷帝の寺院であるブラゴヴェシチェンスキー聖堂を訪れた。ここで見るべきはイコノスタスである。ほの暗い聖堂の足元から天井までを埋め尽くす一面のイコンは荘厳であり、おのずと厳粛な気持ちにさせられる空間であった。ロシアの建造物や装飾品は何をとっても壮麗、壮大で、宝石、武具、馬車から墓所の棺の数、壁一面を覆いつくすイコンまで何をとっても桁外れという印象を受ける。なによりもその印象を深めたのは、ソボルナヤ広場にある、大砲の皇帝、鐘の皇帝であろう。皇帝の鐘は 2000t あり、持ち上げられなかったので 100 年以上そのまま放置されているとのことであった。世界最大の砲台に世界最大の鐘。往時の世界最大を誇るが、双方とも実用に供されることはほとんどなかった。今もクレムリンに残る大砲と鐘の威容がロシア人の気質を物語っているように思われる。クレムリンを後にし昼食をとったあと、14 時半よりモスクワ川のクルーズ船に乗船して、船上よりモスクワ市内の概要を視察する。モスクワ川は大きく蛇行しながらモスクワ市内を走り抜けており、モスクワ川を航行すると主要なモスクワのマイルストーンを確認することができる。モスクワ国立総合大学、ロシアアカデミー、国防省、帆船に乗ったピョートル大帝像、そしてクレムリンと、ロシアの名所旧跡をひとつひとつたどりながらの船旅は、そのままロシアの歴史と現在を理解する旅でもあった。特に興味をひかれたのは、船上から見えた数多くの特徴的な建築物である。スターリン様式と呼ばれるゴシック様式の建築群は、スターリン政権時代のソビエト連邦で建築され、マンハッタンに対抗すべく建てられた

超高層建築物である。モスクワ国立総合大学の本部棟、ロシア外務省、ホテル・ウクライナなど、高く天に向かってそびえる尖塔を模した一群の建築物はモスクワのセブンシスターズと呼ばれている。ソビエト連邦というと重苦しく粗野なイメージを持っていたが、セブンシスターズは重厚かつ優美で、西側世界にいた私にはあの当時見えていなかったソビエト連邦の文化的に円熟した一面に驚かされもした。クレムリンにほど近い船着き場で下船し、その後赤の広場に向かいその日最後の見学をした。クレムリンの赤い城壁の北東に面した赤の広場は、赤い城壁に面しているから赤の広場なのではなく、もともとロシア語の赤い（クラスヌイ）という言葉が美しいを意味していて、「美しい広場」という意味であったそうである。赤の広場に面して、聖ワシーリー寺院、レーニン廟、グム百貨店がある。何かのイベントがあるらしく赤の広場全体がイベント会場となっていて、赤の広場全体を見渡すことができなかった。残念ではあったが、ニュースなどで目にする一糸乱れぬ歩容の軍隊のパレードをイメージさせる赤の広場が華やかなイベント会場として設営されている有様は、確かにロシアが資本主義化したことを印象付けるものでもあった。また、赤の広場近くの救世主ハリストス大聖堂に隣接するピロシキ屋で本場のピロシキを購入して試食する機会を得た。ピロシキというと日本では肉が詰まったパンを揚げたものをイメージするが、ロシアのピロシキは調理パンといった様相で、中身も、ひき肉、キャベツ、サーモン、マッシュルームなど多様であった。その後、雀が丘の展望台からモスクワの街を見学した。背後にモスクワ国立総合大学、眼前にはルジニキ・スタジアム、遠く左手にモスクワビジネスセンターの高層ビル群が見渡せた。赤の広場の色鮮やかな寺院の玉ねぎ型の屋根、厳かなレーニンの眠る廟、華やかなイベント会場の混在する様相に感銘を受けたが、モスクワ市内全体に文化的にも時代的にも様々なものが混在している様子が一望にでき、これが現在のロシアなのだと改めて思わされた。



モスクワ川から見るクレムリン。赤い城壁の向こうの中央の建物がクレムリン宮殿、宮殿右隣がブラゴヴェシェンスキー聖堂、さらに右隣にアルハンゲリスキー大聖堂

[撮影：岡村陽子]

30日は朝9時にホテルを出発し、ボリショイ劇場の建物を見学した。ボリショイとは大きいという意味で、オペラとバレエを上演する劇場である。シーズンオフで実際には演目を見ることができなかつたのが心残りであった。その後、昨日訪れた赤の広場に面している Gum 百貨店を見学した。Gum百貨店は3階建てのアーケード3本で構成されている。数々のブランドショップ、色とりどりの食料品店、レストランが入っており、ここに来ればまさに何でもそろろう。アーケードの中を縦に横にと渡り歩きながらお店を冷かして歩くだけでもとても楽しい場所である。昼食後、タカンスカヤ駅から2駅先のコムソモーリスカヤ駅まで地下鉄に試乗した。地下鉄の駅は相当深く、防空壕として使うため、インフラ設備を避けるため、遺跡等を避けるためなどの理由により深くなっているとのことであった。モスクワの地下鉄はその深さだけでなく、その壮麗な装飾でも有名である。最初の環状線は1935年にでき、スターリン様式の建築の一環として華麗な装飾がされたのだそう。コムサモールスカヤ駅ではホームの端に大きなレーニンの胸像が設置されていた。地下鉄駅をあとにして向かった先は、トレチャコフ美術館であった。トレチャコフ美術館は、10万点ものロシア美術が所蔵され、陳列されているものだけでも1000点を超えるエルミタージュに並ぶ美術館である。特に素晴らしいのはイコンを含む古典ロシア芸術である。西洋の教会芸術とはまた趣の違う東方のキリスト教世界の聖像画の数々を見てまわり、さらに、なかなか日本には見ることのできないロシアのオールヌーヴォを代表する作家ヴルーベリの壮大な作品などロシアの近現代の作品群も堪能できた。

31日は、高速列車「サブサン号」でサンクトペテルブルグへ向かう。定刻通りの6時40分の出発である。モスクワからサンクトペテルブルグへは約4時間半で到着は10時30分過ぎであった。サンクトペテルブルグのモスクワ駅（目的地の地名が駅名となるため、サンクトペテルブルグにはサンクトペテルブルグ駅はなくモスクワ駅）からバスに乗って一行は3時間近くのバス旅でノブゴロドへと向かった。



モスクワの地下鉄コムソモーリスカヤ駅構内

[撮影：岡村陽子]

ノボゴロドに到着しキエフ風チキンカツレツの昼食をとったのち、ノボゴロドのクレムリン周辺の視察に向かう。ノボゴロドは、ロシア最古のクレムリンを擁し、モスクワ以前にはロシアの中心であった都市である。ノボゴロドと周辺の文化財は世界遺産として登録されており、中世にハンザ同盟の根拠地が置かれ商業都市として栄えた面影をあちこちに残している。まずは、素朴な白い壁に黒い玉ねぎ型のドームをのせたキリスト変容教会を視察した後、往時は市場があり国際的な貿易の場であったというかつてヤロスラフ賢帝の宮廷があった場所に向かい、12世紀から17世紀にかけて数多く建立された教会群の視察を行った。教会としての規模はそれほど大きくはないがシンプルでかわいらしい教会がいくつもいくつも並んでいて当時の賑わいを思わせる。ヴォルホフ川を渡った向こう岸には赤い城壁に囲まれたクレムリンがあり内部には、1050年に建てられたロシア最古のソフィア聖堂、戴冠されているミハイル・ロマノフをはじめとした128体の歴史上の人物で飾られたロシア1000年記念碑がある。モスクワやサンクトペテルブルグが建設される前のロシアの古の都市は、今は静かな一地方都市であり栄枯盛衰を物語っていた。クレムリンをあとにして夕食をとったのちホテルに入り、モスクワ、サンクトペテルブルグ、ノボゴロドとあわただしく移動した一日を終えた。

翌9月1日は、9時前にホテルを出発しバスでサンクトペテルブルグに戻った。サンクトペテルブルクは1703年に創設されたロシア帝国の首都であった都市である。ネヴァ川の河口に位置し、42の島で構成されている。5～7月の白夜の時期が特に美しく、8月15日からはもう秋だという説明を受けたが9月の初めは街を訪れるにはいい季節であった。聖イサク寺院に近いレストランで昼食をとり、聖イサク寺院、ニコライ1世像、「罪と罰」の主人公



ノボゴロドのクレムリンにあるロシア1000年記念碑。一番上の像が戴冠を受けるミハイル・ロマノフ

【撮影：岡村陽子】



サンクトペテルブルグ、ドストエフスキー「罪と罰」の主人公ラスコリニコフのアパートに刻まれているプレート

【撮影：岡村陽子】

ラスコーリニコフの家を視察して回る。「罪と罰」に関連して、ドストエフスキーが執筆した部屋や、老婆の部屋などロシア文学の舞台も歩いてみて回った。その後ネヴァ川をわたりペテロパブロフスク要塞を見学する。サンクトペテルブルグの街は、1703年にこの要塞に建設された大聖堂から始まる。122mの尖塔をもつ大聖堂には、ピョートル大帝、エカテリーナ2世、ロシア帝国最後の皇帝ニコライ2世とその家族の棺が安置されている。要塞内には監獄もあり政治犯が収容されていたという囚人房も視察した。要塞をあとにし、「文学カフェ」というプーシキンやドストエフスキーが通ったカフェレストランで夕食をとりホテルへ入った。

2日は、まずはバスでピョートル大帝夏の庭園へと向かった。緑が美しい広大なバロック様式の整形式庭園である。夏の庭園の名前にふさわしくそこかしこに趣向を凝らした噴水がしつらえてあるのも楽しかった。庭園内のレストランで昼食をとり、またサンクトペテルブルグの中心部へと戻った。午後のサンクトペテルブルク大学との交流の前に、サンクトペテルブルグの運河をめぐるクルーズ船に乗船して、街の概要を船上から視察した。サンクトペテルブルグはなるほど運河の街で、ペテロパブロフスク要塞、エルミターージュ宮殿、血の上の教会もバスの窓からみた姿とは趣の違う姿を堪能することができた。その後、サンクトペテルブルグ大学を訪問した。サンクトペテルブルグ大学には、鈴木泰人文科学研究所所長の労により、10人以上の日本研究者がわれわれを待っており、ピロシキをいただきながらそれぞれ自分の専門についての紹介や意見交換を行った。サンクトペテルブルグ大学のフィリップ先生の研究室に集まっていたロシア側のメンバーは、サンクトペテルブルグ大学東洋学部日本学科の先生たちだけでなく、ロシア最古の博物館であるクンストカメラの日本美術研究者、エルミターージュ美術館のボゴリューボフ先生がおり、それぞれの専門は宇治拾遺物語から蘭学、日露関係、根付まで幅広いものであった。サンクトペテルブルグ大学ではこの2年間博士号が出せていない、



サンクトペテルブルグ大学東洋学部日本学科を含む
サンクトペテルブルグの日本研究者と交流

[撮影：砂山充子]

今後サンクトペテルブルグ大学の東洋学研究所もどうなるかわからないという話に、やはりまだまだ安定していないロシアの現状を垣間見ることができた。その後のホテルのレストランで行われた交流会でも、日本に対する学術的な知識からロシアの日常的な風習までが話題にのぼり、有意義な日露の学術交流の時間となった。

最終日の3日は9時にホテルを出発しエルミタージュ美術館を見学した。サンクトペテルブルグといえばエルミタージュ美術館であるが、エルミタージュ美術館は収蔵されている美術品だけでなく、宮殿そのものも豪華絢爛ですばらしい。エルミタージュ宮殿は1754年にピョートル大帝の娘であるエリザヴェータ女帝の命により冬宮として建設された。その後エカテリーナ女帝の時代に美術品の収蔵を目的として増設され現在のエルミタージュ美術館の原型となった。エルミタージュのコレクションはヨーロッパ各地から集められ、1774年には2000点に上っていたという。ロマノフ王朝の終焉後、革命、2度にわたる世界大戦という受難の時代を経た1945年、ようやく美術館として再開館されるに至った。現在は300万点を超える収蔵品を誇り、1日かけても回りきることのできない壮大な美術館となっている。我々一行は、ポイントを絞った2時間の見学で、宮殿内の豪華な回廊や広間に飾られたイタリア美術、スペイン、オランダ美術、印象派とダイジェスト版でエルミタージュ美術館の雰囲気味わった。

一行はエルミタージュをあとにして、昼食をとり、サンクトペテルブルグ空港からモスクワ乗り継ぎで無事9月4日の朝成田に帰着した。今回のロシア研修旅行は大きなトラブルもなく、けが人病人も出ることなくつつがなく行程を終了することができた。文化やイデオロギーが様々に変化してきたロシアという国を、今回訪問した都市や史跡、交流した研究者を通してさらに深く知ることができたことが今回の視察の大きな収穫であった。

[黄金の環(セルギエフ・ポサード、ウラジーミル、スーズダリ)、一部モスクワの記述は飯沼健子所員が、モスクワ、ノヴゴロド、サンクトペテルブルグは岡村陽子所員が担当した。]